

# 寺本光朗名誉教授：人と学問

千葉商科大学名誉教授 吉川久治

このたび寺本光朗氏の定年退職に伴う定年退職記念論文集出版に際し、同氏の人となりと研究姿勢の一端について記述したい。寺本光朗氏は、1957年3月、同志社大学大学院法学研究科修士課程を修了すると同時に財団法人世界経済研究所（所長：小椋広勝）の所員となりこの時点から彼の政治経済問題に対する研究者としてのスタートが切られた。

1964年11月には同研究所の理事に就任、その後、財団法人世界経済研究所付属アジア・アフリカ研究所（所長：岡倉古志郎）が発足するに当たり、同研究所の副所長に就任した。現在、同研究所は特定非営利法人（NPO 法人）アジア・アフリカ研究所に改組されたが、その専務理事として活躍されている。

アジア・アフリカ研究所の目的は、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ（以下 AALA）3大陸における民族独立、平和、経済的繁栄、社会的進歩を目指す諸国民族の歩みが世界史の画期的な転換を促す重要なエネルギーの一つであるとする立場から AALA 諸国の政治、経済、社会、文化および AALA を巡る世界政治と世界経済上の諸問題について理論的、基本的諸問題の研究と同時に現状分析の両面から研究調査を行い、もって日本における AALA 研究の水準を引き上げると同時に AALA 諸国人民との連帯を強化しようとするまことに画期的なものである。

寺本氏は、かかる研究所に所属すると同時に同研究所の機関誌に数多くの先進的な研究業績を発表すると同時に千葉商科大学商経学部就任して以降も当該大学の紀要『千葉商大論叢』でも積極的に投稿されてきた。1978年、それまで雑誌『経済』（新日本出版社）、『月刊アジア・アフリカ研究』（アジア・アフリカ研究所）、ならびに『アジア・アフリカ経済特報』（同上）に発表された業績をまとめて『新植民地主義と南北問題』（大月書店）を出版された。同書は、彼のそれまでの南北問題研究の集大成のひとつであったといえよう。

本書は、前半部分で新植民地主義の実態分析、すなわち軍事＝政治面でそれが

いかにそれが展開されてきたか、また、経済＝金融面でどのような形態で推進されていったかに言及されている。さらに、発展途上諸国側からの新植民地主義に対抗するものとして1974年に国連で提起された新国際経済秩序の意義について論及されている。後半部分では1970年代の「石油危機」を背景に世界政治経済で注目を集めつつあった中東産油諸国の石油をめぐる諸問題が取り扱われている。当時、わが国の学界では、新植民地主義に関する体系的な研究は未だに完成されておらず、その点で本書は画期的なものであったといえよう。

寺本氏は当大学在職中、在外研究員として1983年から84年にかけてメキシコ (El Colegio de Mexico)、インド (国家行政研究所)、シンガポール (シンガポール国立大学経済学部) に出張され、現地の経済動向に直接触れると同時に政治経済研究者との交流を通じて発展途上国研究の水準を向上させることができた。さらに、1999年7月～9月にかけて彼が所属するアジア・アフリカ研究所と研究提携をしているキューバのアジア・オセアニア研究所 (El Centro de Estudios sobre Asia y Oceania) に短期許可研究員として出張された。そこでは、世界経済研究者などと交流を深め、開発理論の研究に大きな成果を上げることができたといえる。

ところで、寺本氏は、2003年3月、当大学商経学部を定年退職された後、当大学特任教授に任用された。残念ながら彼は、1987年6月に大病をわずらい、現在も病気療養中にもかかわらず研究意欲は少しも衰えることなく研究は精力的に継続されている。現在の研究課題は、「グローバリゼーションと不平等・貧困問題」であり、ここ数年この問題に果敢に取り組んでおられる。

1969年、世界銀行による「ピアソン国際開発報告」(the Pearson Report on International Development) は、すでに先進諸国と発展途上諸国との間の格差は拡大しつつあり、この問題は今日われわれが解決を迫られている最重要課題のひとつであると指摘していた。その後、1999年の「国連開発計画」(UN Development Programme) によると、世界における所得格差の拡大と生活水準の不平等は、グロテスクなほどの比率に達していると指摘されている。さらに、最近の UNDP (2005年) の推定によると Forbes 誌に掲載されている世界の最富裕者500人の所得は、最も貧しい4億1600万人の所得をはるかに凌駕するものとなっていると報告されている。このような現代資本主義世界が抱える焦眉の急を要する問題に対し寺本

氏は、歴史的視点から精力的に取り組んでおられることに敬意を表すると同時にその成果の一日も早い完成が大いに期待されるものである。